

Vol.1 — 2026年 春号

巻頭言「境界線から」

マウイの風は、いつも何かを運んでくる。

2023年8月8日、ラハイナ (Lahaina) を襲った炎は、かつてハワイ王国の首都だった町を一夜で灰にした。150年のバニヤンツリーは黒く焼け、100人を超える命が失われた。私たちの暮らしていたトレラーも、その渦中にあった。

あの夏、マリア・ラナキラ・カトリック教会 (Maria Lanakila Catholic Church) ――ラハイナで唯一、炎をくぐり抜けた教会――で出会った人たちがいた。「あなたたちの事情は聞かない。ただ、ここにいていい」と言ってくれた人たちだ。在留資格も住所も問われなかった。制度の内側にいて、その限界を知っている人たちの手が、制度の外にいた私たちに差し伸べられた。

あれから3年。私たちは「境界線を越える」ことを仕事にした。遺骨を故郷に届ける。記憶をクォーツガラスに刻む。そしてこうして言葉を刊行物として残すことを始める。

このニュースレターの1部は、国立国会図書館に届けられる。つまり、あなたが今読んでいるこの文章は、日本の公的なアーカイブに半永久的に保存される。「誰かがここにいた」ことを残す――これが私たちの仕事であり、このニュースレターそのものも、その実践のひとつだ。

佐藤拓也

付録：海を渡った骨、帰らなかった人――遺骨帰還の現場から見える「存在証明」の問題

第一章 K家の物語――ロサンゼルスから九州へ

※ ご本人の許可を得て、一部を匿名化して掲載しています。

海外で亡くなった日本人の遺骨は、どこへ行くのか。厚生労働省の統計によれば、海外での邦人死亡者数は年間約800～1,000人。その多くは遺族によって引き取られるが、身元不明、引き取り手なし、あるいは搬送費用の問題で現地に留まる遺骨も少なくない。私たちソウルキャリアは、こうした「帰れなかった人々」の遺骨帰還に取り組んでいる。ハワイ・マウイ島のラハイナ墓地を起点に、無縁仏として埋葬された日系移民の調査、遺族からの個別依頼による遺骨搬送、そして帰還先の墓地や寺院との調整を行っている。ロサンゼルスに暮らすKさん（70代）から連絡をいただいたのは、2025年の秋だった。

「父の遺骨の一部を、祖父の墓がある九州に届けたい」

Kさんの父は1940年代にハワイから米国本土に移り、そのまま日本に帰ることはなかった。90歳で亡くなるまで、「いつか帰る」と言い続けていたそうだ。Kさんは父の遺志を継ぎ、分骨した遺骨を祖父の墓に納めることを希望した。

問題は、祖父の墓の正確な場所がわからないことだった。Kさんが知っていたのは、九州のある町の名前と、寺院の宗派だけ。私たちは現地の寺院に連絡を取り、過去帳と墓地台帳を照合する作業から始めた。

K家 帰還記録（概要）	
項目	内容
依頼者	K氏（70代・ロサンゼルス在住・日系三世）
故人	K氏の父（1920年代ハワイ生まれ、1940年代に米国本土へ移住、2020年代没・享年90歳）
帰還先	九州某市 ○○寺院内墓地
搬送形態	分骨（米国内での火葬済み遺骨の一部）
調査期間	2025年10月～2026年1月（約3ヶ月）
調査内容	寺院過去帳との照合、墓地台帳確認、現地墓石の状態調査、住職との調整

3ヶ月の調査を経て、私たちは古い墓地でKさんの祖父の墓石を見つけた。苔に覆われながらも、名前は読み取れた。刻まれた没年から逆算すると、明治後期にこの地で生まれ、大正期にハワイへ渡航したことがわかる。祖父は移民一世。Kさんの父は二世。Kさん自身は三世。三代にわたる移動の軌跡が、一基の墓石に集約されていた。私たちはKさんと一緒に九州を訪れた。墓地の清掃を行い、住職に改めて供養の説経をあげていただいた。墓前で手を合わせたKさんが言った言葉が忘れられない。
「父は帰ってきました。ありがとう。」

この一言には、90年間の時間が圧縮されている。1920年代にハワイで生まれた男が、「いつか帰る」と言い続けた故郷。その遺骨が三世の手によって、ようやく祖父の隣に納められた。遺骨の重さは数百グラムに過ぎないが、その重力は三世代の人生を貫いている。

第二章 数字が語ること――墓石調査の現場から

遺骨帰還の仕事を始めから、私たちは墓石と向き合う時間が飛躍的に増えた。群馬県太田市・大泉町周辺で行った調査では、約5,000基の墓石を踏査し、墓碑銘の記録、素材の劣化状況、管理状態を記録した。この調査で見えてきたのは、「記録の消滅」という静かな危機だった。

群馬県墓石踏査 概要データ	
項目	内容
調査地域	群馬県太田市・大泉町周辺
踏査数	約5,000基
素材内訳（推計）	御影石 約85%、砂岩・凝灰岩 約10%、その他 約5%
判読困難	全体の約15～20%（風化・苔・破損により墓碑銘の判読が困難）
無縁化	管理者不在と推定される墓所：全体の約25%

全国的に見れば、毎年10万基以上の墓が「墓じまい」されているとされる（厚生労働省衛生行政報告例）。改葬件数は2022年度に過去最多の約15万件を記録した。墓石の寿命は御影石で100～200年、砂岩や凝灰岩はさらに短い。つまり、今ある墓石のほとんどは、200年後には物理的に判読不能になる。

さらに深刻なのは、デジタル記録の脆弱性だ。クラウドサービスの平均寿命は10～15年。S&P 500上場企業の平均寿命すら、1958年の61年から現在は20年未満に縮小している（McKinsey調査）。企業が消えれば、その企業が管理していたデータも消える。オンライン墓地サービス、デジタル遺影、クラウド上の家族アルバム――これらは全て、サービス提供者の存続に依存している。

紙は数百年で朽ちる。デジタルはサーバーが止まれば消える。墓石は風化する。では、人の存在を1000先に伝えるには、どうすればいいのか。

第三章 石英という解――トキストレージの技術と実績

石英（SiO2）は地球上で最も安定した鉱物のひとつである。融点1,713℃。モース硬度7。酸にもアルカリにもほぼ侵されない。日立製作所と京都大学の共同研究（2012年）は、石英ガラスへのレーザー記録で3億年以上のデータ保存が可能であることを実証した。Micro soft Project Silicaも同様のアプローチでデータセンター向け開発を進めている。

トキストレージは、この石英ガラスの可能性を「一人ひとりの存在証明」として届けるプロダクトである。代表の佐藤が半導体製造装置開発を起点とする20年超のエンジニアリングキャリアを経て、石英表面への金属蒸着を含む造形刻印技術を確立した。刻印されたQR

コードからデジタルメモリアルページにアクセスでき、サーバーが不要な自己完結型の存在証明として機能する。

奉納実績
・伊勢神宮：2024年奉納完了。ソウルキャリアがお手伝いした全ての帰還の記録を刻んだクォーツガラスを奉納。神宮司庁より正式に受領。 ・延暦寺（比叡山）：2024年奉納完了。天台宗総本山にて受領。 ・独自開発：音声バイナリQRコード技術により、肉声をクォーツガラスに刻印するボイスメモリアルコースを展開中。 伊勢神宮と延暦寺――日本の精神的基盤を象徴するふたつの聖地にトキストレージが納められている事実は、単なるマーケティングではない。数百年の時を経て存続してきた宗教施設の懐に、千年の存在証明が物理的に置かれている。建物は建て替わっても、奉納物は継承される。それは伊勢の式年遷宮が証明している。

第四章 佐渡へ――なぜこの島なのか

2026年春、私たちは佐渡島に拠点を移す。なぜ佐渡なのか。

佐渡は「記憶される場所」ではなく、「忘れられた人々の記憶が残り続けた場所」だ。流刑の地で名もなき人々が暮らし、都から流された知識人が持ち込んだ能楽が600年途絶えなかった島。順徳上皇、日蓮、世阿弥――権力の中心から排除された人々が、この島で「存在の痕跡」を残し続けた。

河原田本町の物件は築約100年の古民家だ。1925年（大正14年）に建てられ、関東大震災の2年後に生まれたこの家は、昭和の戦争も、高度成長も、バブルも、平成の過疎化も見えてきた。店舗併設住宅として地域の商業を支え、テナントが去った後も建物は残った。ここをトキストレージの体験拠点にする。お客様が佐渡に来て、自分の手で存在証明を作る場所。観光ではなく、「1000年後に残るもの」を作る旅。娘と一緒にこの家を直しながら、「一緒に作った家」にしていく。

第五章 「存在証明の民主化」という問い

Kさんの父の遺骨は、三世であるKさんが費用と時間をかけたからこそ帰還できた。しかし、身寄りのない人、費用を出せない人、そもそも「自分がここにいた」ことを記録する手段を持たない人は、どうなるのか。

住所がない。戸籍がない。保険証がない。――日本にもアメリカにも、「存在していないことになっている人」がいる。行政の窓口で「該当なし」と言われた経験はあるだろうか。あるいは窓口の向こう側で「規則ですから」と言わざるを得なかった経験は。

存在証明の民主化とは、こうした境界線を問い直すことだ。5万円で1000年の存在証明が手に入る。1年あたり50円。この価格設定は、「墓石に300万円かけられる人だけが記録を残せる」という構造への異議申し立てでもある。

トキストレージのお客様がお支払いになる代金の一部は、身元不明者や無縁仏の遺骨帰還活動に充てられる。誰かの存在証明を作ることが、誰かの誰かの存在証明を支える。この循環こそが、私たちの事業の核心だ。

コラム：なぜ石英なのか――素材比較		
素材	寿命	備考
紙（和紙）	約1,000年	保存環境に大きく依存。湿度・虫害・火災に脆弱
御影石	100～200年	酸性雨による風化が進行中
磁気テープ	10～30年	温湿度管理が必要。再生機器の確保が課題
SSD/HDD	3～10年	電源供給と定期的な書き換えが必要
クラウド	事業者依存	平均寿命10～15年
石英ガラス	理論上3億年以上	サーバー不要。維持費ゼロ。自然劣化耐性が極めて高い

バウンダリストの窓

「システムの外」から見えるもの

バウンダリストとは、境界線上に立つ人のこと。システムの外にいる人。あるいはシステムの内側にいて、その限界を見ている人。私たちの活動――遺骨帰還、存在証明の記録、島への移住――は全て、何かの境界線を越える行為だ。国境、生と死の境界、デジタルと物理の境界、都市と離島の境界。

境界線の両側にいる人たちが出会うとき、何かが変わる可能性が生まれる。次号では、実際に「存在証明の壁」に直面した方のインタビューを掲載予定。

トキコエの台所

マウイのスパムむすび――境界線上の味

ハワイのコンビニに行くとき、必ず見つかるのがスパムむすび。日本のおにぎりとアメリカのスパム缶詰が出会って生まれた、まさに「境界線上の食べ物」。ラハイナの火事の後、避難所で最初に配られた食事のひとつもスパムむすびだった。
【材料・4個分】 ごはん2合分（少し固めに炊く）、スパム1缶（薄切り4枚）、焼きのり4枚、醤油 大さじ1、みりん 大さじ1、砂糖 小さじ1
【作り方】 （1）スパムを1cm厚に切り、フライパンで両面こんがり焼く。（2）醤油・みりん・砂糖を混ぜたタレを絡める。（3）スパム缶を型にして、ごはん→スパム→ごはんの順に詰める。（4）海苔で巻いて完成。
マウイの風に吹かれながら食べると、日本とハワイの境界線が溶けていく気がします。

お知らせ

パトロンプログラム トキコエニュースレターの印刷版は、パトロンの皆さまに毎号お届けしています。Visionaryパトロン：印刷版＋名前掲載＋年間報告書。Builderパトロン：印刷版＋名前掲載。Starterパトロン：PDF版＋名前掲載。詳しくはPatronプログラムのページをご覧ください。

寄稿のお願い
「境界線」にまつわるあなたの経験を、聞かせてください。次号以降で、読者の声を掲載するコーナーを設ける予定です。
次号予告 Vol.2 ― 2026年 夏号（2026年7月発行予定）特集：レジリエンス――ラハイナから3年。2023年8月のマウイ島火災から3年。復興の現在地と、災害が見せてくれた「境界線」について。

奥付

誌名	トキコエニュースレター / Tokikoe Newsletter
巻号	第1巻 第1号（通巻1号）2026年春号
発行日	2026年4月1日
発行	Pearl Memorial（運営: Universal Need株式会社）
発行人	佐藤拓也・佐藤美菜
発行所	Maui, Hawaii, USA
連絡先	business@satotakuya.jp

価値	非売品
ISSN	申請予定

本誌は国立国会図書館に納本しています。

納本・寄贈先:

JICA横浜

海外移住資料館、日系アメリカ人国立博物館（ロサンゼルス）、新潟県立図書館、佐渡市立図書館、伊勢神宮文庫、延暦寺文庫

© 2026 Pearl Memorial / Universal Need株式会社 無断複製、転載を禁ず。

共鳴で、境界線を越える。 Crossing boundaries through resonance.

次号は2026年夏号（7月発行予定）です。